

釜ヶ崎の歴史は、集団或いは社会の歴史ですが

各個人にも、歴史があります。個人史、家族史の範疇です

人の強みは、何があっても生きていければなんとかなること、ですが・

夜間学校ニュースの歴史紹介シリーズは、なんとなく、好評のようであります。

ところが、前回夜間学校ニュースは、一転、その好評を裏切って、自己の内面に向かうことのお勧め。歴史学から心理学へと転向した趣があります。

世間一般、本の売れ行きからNHKの大河ドラマの傾向を見ても、歴史物の受けはいいが、心理劇を強く意識したものの受けはあまり良くないとしたものです。

ではなぜ、夜間学校は、世間受けしないものに話題を転じたのかというと、釜ヶ崎では、心理学の需要が高いと思うからです。

これまでに、聞き取り調査やら福祉相談などで、割合に多くの人の個人史、その人のそれまでの人生歴を聞いてきた体験からそう思うのです。

ある人は、幼少期を戦後の混乱の中に生き、養い親はいるが戸籍も何も分からぬまま、10代になるかならないかで独立、自分の身一つで頑張ってきて、野宿に至った。

ある人は、自分の事業に失敗し、あるいは保証人になつたことで借金を抱え、家族離散、釜ヶ崎に来て再起を図ろうにもアブレ続きで野宿。

ある人は、突然、一人息子を交通事故で失い、生きる気力を失って失業・離婚、気がつけば公園で野宿。

次男・三男の人は、家業を継げず、都会に夢を求めて出てきはしたが、努力はむなしく敗者意識だけが残って野宿。

「そんなモンばかりやないで、オレは自分の身一つ、日雇いで楽しく生きてきたわ。今、野宿していても、これはこれでシャナイ。気楽に生きて、死ぬだけや」という人もいる。

「それも人生、これも人生」です。「生きてる内が花」なのです。同じ生きるなら、自分の命を大事に、自分の可能性を死ぬまで信じて生きませんか。「いわれなくても、今でも、野宿でも、わしや、そう考えて生きてる。」

それはそれで、わかりたいと思います。しかし、もつと命と可能性を広げる生活形態はないでしょうか。それを選べない自分と向き合ってみては？(裏面は私のケース)

妻子の目前、自殺

家族会議で非難されて

十七日夕、大阪市大正区で共かせぎの夫婦が別れ話のけんかのすえ高校の入試を受けて帰ってきた長男ら妻子四人の前で父親が青酸ソーダを飲んで自殺した。子ども三人が母親の肩を持ったのに悲観したらしい。

同日午後五時ごろ大正区

、メッキ工 熊夫さん(四八)が自宅奥六畳でアルサロに勤める妻 さん(三八)と電気ゴタツをはさんで「出ていけ」「別れてやる」と激しく争った。二階にいた洋裁学校生の長女(二八)と中学二年の二女(二四)が降りてきて「けんかはかりするならわたしたちが家を出て独立する」といった。そこへこの日大阪立 商業高校の入試を終わって帰った長

男(二五)が「けんかするならよそへ行ってやってくれ」となった。

熊夫さんが三人を集め「お前たちはどうちゃんとかあちゃんのどっちにつくか」ときくと、末娘が「おかあちゃんがいい」と答えた。カッとなった熊夫さんは「死んでやる」とそのまま台所へ走り、青酸ソーダの粉末をプラスチックのコップに入れて水でとかし、コタツの上へ持ってきて家族全員が見ている前で飲みほした。すぐ苦しみ出し「青酸ソーダだ。医者を呼んでくれ」といって倒れ間もなく死んだ。

大正署の調べによると さん一家は下関市内で食品加工業を営んでいたが一昨年末に倒産、熊夫さんは知人をたよって単身来阪し

大正区 鍛金 さん(経営)に就職した。債権者の取り立てがきびしいので間もなく妻子を呼び寄せたが月収三万円で生活が苦しく、昨年五月から さんはミナミのアルサロに勤めだした。そのころから気の弱い熊夫さんはノイローゼ気味で さんに「帰りがおそい」とあたり散らして夫婦げんかがたえず、そのたびに「死んでやる」とくり返していた。

前夜もケンカをし、この日は午前七時四十分ごろ出勤したがカゼ気味だと間もなく帰宅し、けんかをむし返した。大正署は家族をおどかさうと自殺するまねをしたが致死量をこえていたとみている。

さんの話「いつも、死ん

でやる」とはいついたが、ほんとうにしませんでした。青酸ソーダとわかっていたら絶対飲ませはしなかったのに。子どもたちと与えたショックを考えると気が狂いそうです」

▲1966(昭和41)年3月18日 読売新聞

今から45年前の新聞記事です。熊夫さんが生きていれば、93歳。長男は61歳。母親は83歳。長女は63歳。次女は59歳。

ということに、なります。

熊夫さんは、敗戦時には21歳。その前は、中国大陸を経て南方の戦場。戦地加算で軍人恩給を受ける資格はあったから3年間？。ボツダム兵長だったようですから、現役では1等兵ということでしょう。長男は小学校4回、中学校1回転校しています。この記事以前にも家族史があり、そして、後も。